



「学ぶべきことは人々の中にある」。世界の途上国で医療・研究を続ける山本太郎さん
＝長崎市坂本1丁目、長崎大熱帯医学研究所

長崎大学熱帯医学研究所教授

山本 太郎さん(51)

学ぶべきこと求めて

西半球の最貧国、感染症の宝庫とも呼ばれたカリブ海の島国ハイチで、2003年7月から医療・研究活動に従事し、内戦下に出国するまでを記録したのが、「ハイチ いのちの闘い」日本人医師の300日（08年、京都・昭和堂）である。

その中に印象的な場面がある。出国間際の夜、アパートでひとり、さだまさしさんの「風に立つライオン」を聴く。「深い悲しみを湛えたアメリカングレースのリズムがハイチの夜に木霊した」と記した。

さださん原作の「風に立つライオン」は、今春映画化され、話題を呼んだ。ご存じのように、映画はアフリカ・ケニアで国際医療活動に当たった長崎大熱帯医学研究所の医師をモデル



2003年11月、ハイチの結核療養所で30年以上働いた須藤昭子医師（右）とともに（本人提供）

に、その生きざまを描いた作品だ。曲は30年近く前に発表されているが、1990年代には途上国に赴く青年海外協力隊員のいわばテーマ

ソングとしてウォークマンに入れられていた、と山本太郎さんは述懐する。長崎大医学部に進んだのは、母方の祖母の影響もあったようだ。2歳から数年

途上国で感染症に挑む

間、その祖母に預けられている。高校2年の時、祖母と母が初めて一緒に旅した先が長崎だった。長崎はよかったよ、と祖母から何度となく聞かされていた。

長崎大医学部を卒業し、大学院でウイルス学の研究に携わった後、東京大学に入り、国際保健学を学んだ。感染症対策に関わろうと、途上国の保健を分野とする国際保健学の勉強をやり直したためだ。

当時、先進国で有効なワクチン接種が途上国では子どもたちが死に至るケースが相次いだ。アフリカではエイズの流行も始まっていた。その国の歴史や文化を知らなければ医療はできないということがわかった。

その後、長崎大熱帯医学研究所に移り、アフリカ・ジンバブエでマラリア対策

に従事し、京都大にいたころだ。ある米国人医師から「学ぶべきことは人々の中にある」との言葉を教えられた。広島で被爆し、ネパールで伝染病治療に尽くした岩村昇医師（故人）が紹介した言葉だった。

その言葉に後押しされ、ハイチへ。貧しい人たちのためにという気持ちより、どうして人は病に罹るのか、貧困とその社会環境への関心がハイチに赴いた大きな動機だった。

折しも今月、テロが起きたパリで、国連気候変動枠組み条約第21回締約国会議（COP21）が開かれた。会議では産業革命以来の気温上昇を1.5度に抑えるパリ協定を採択した。

地球温暖化が進むと、台風や集中豪雨がさらに多発するほか、感染症の危険性が増大する。山本さんが同時に注目するのは、気候変動と人口動態の関係だ。日本は少子化による人口減少という世界で類例のない経験が始めている。人口が減少すると、疾病流行の現象が変わる可能性も考えられるという。

今、「うちプロジェクト」と名付けた調査、研究を始めている。ネパールやメキシコなどの高地で暮らす人の便を集め、感染症対策への新たなヒントを得るのが狙いだ。年明け2月には、米国の専門家たちとメキシコのアステカ文明遺跡に向かう。

文・特別編集委員

写真・写真メディア部 則行優志

峠 憲治

プロフィール

やまもと・たろう 1964年、広島県竹原市生まれ。90年長崎大医学部卒。同大学院、東京大学大学院を経て京都大医学研究科助教授、長崎大熱帯医学研究所助教授、外務省国際協力局多国間協力課長補佐を務める。現在は長崎大熱帯医学研究所国際保健学分野教授。アフリカやハイチで感染症対策に従事し、ハイチ、東北、ネパールなどの大地震被災地で負傷者らの支援活動に当たった。著書に「新型インフルエンザ 世界がふるえる日」「ハイチ いのちの闘い—日本人医師の300日」などがある。学生時代はボートの練習に明け暮れた。長崎大医学部漕艇部長も務める。

取材のあとで

「長崎ひと百景」はこのところ、海外を拠点としたり接点として活動する人を取り上げることが続いている。意図したわけではないのだが、結果的にそんなことになった。

考えてみれば、長崎は江戸時代から国内外の人たちが行き交うキーステーション的な役割を担っていた。取材をしながら、そうした長崎が持つDNAとこれらの人た

ちがどこかでつながっているのではと思う。

山本太郎さんは、瀬戸内海や島を眺めて育ち、日本西端の長崎で学び、そこを足場に世界の途上国を歩いている。ハイチには、終わりのない生活の苦しみを表す「山の向こうは、また山」ということわざがあるそうだが、それらの国や地域で奮闘する日本人の姿を想像してみる。